

徳島県の南端、海陽町ししくい穴喰の田井家には、この地の過去の地震や津波の様子を記した「しんちようき震潮記」が残されています。その一端を紹介します。

…嘉永七年(一八五四)十一月四日の午前九時、中揺りの地震が続いて二度あり、海面にわかには大波が立ち、あじ島を打ち越えて、川の中ほどまで潮が三度入ってきました。

人々は大変驚いて四方へ逃げ散りました。米麦や諸道具を山上へ持ち運び、今にも津波が襲って来る心地がして、大騒動となりました。

夜に入ってから同じ騒ぎは続きました。万一、出火するかも分からないので、役人達は火の用心の警戒に回り、浜辺ではかがり火を焚いて、潮に異変があったならば、知らせるよう手配しておきました。家々に残っている者たちは、知らせがあれば少しづつ身の回りの物を持って、あたらやま愛宕山へ逃げのぼるという覚悟で、浜辺より今にも知らせが来るかと心細くも待っていました。そこへ、夜一〇時ごろ中揺りの地震が一度ありました。

家々に残っていた者も大半は逃げ去り、道具も持ち運び騒々しくなりました。また、浜辺には潮の異変に気を付け、かがり火を焚いており、あちこちに逃げ退いていた者は、かがり火が消えたならば、津波が押し寄せて来ると思っ、本当に薄氷を踏むような思いで心細く、遠見から見守っていました。

明け方になって、一息つき、翌五日、潮の異変も少しばかりは直り、地震も穏やかになったので、あちこち逃げていた人々は、諸物を持っておいおい戻ってくるような状態で、これで少しは穏やかになりました。…



震潮記▶

背景

「震潮記」は、ししくい穴喰の組頭庄屋田井久左衛門宣辰(1802~1874)が、穴喰を襲った地震・津波の様子を記したものです。この中には、永正9年(1512)、慶長9年(1605)、宝永4年(1707)、嘉永7年(1854)の記録が記されています。平成18年には、子孫の田井晴代氏はるよが津波時の救命の一助になればとの思いで、現代語訳を刊行されました。この話は、「嘉永七年十一月五日震潮日々あらましの記」より、津波に備えて昔の人がかがり火を焚いたなど多くの教訓が述べられています。

アクセス

愛宕神社

- JR穴喰駅より東南東へ直線距離で約200m
- 海陽町穴喰浦
- 緯度経度 北緯33度33分55秒, 東経134度18分09秒

